

シリア語小辞 1- の直接目的語を示す用法と 定性との関わりについて

原 将吾

要 旨

シリア語には直接目的語を表すマーカーに 1- という小辞がある。これはすべての直接目的語に対して用いられるわけではない。そのような義務的でない目的語標示のあり方は Differential Object Marking (DOM) と呼ばれ、広く世界中の言語に見られる現象である。本研究は言語横断的な DOM 研究も視野に入れつつシリア語の事例を検討するものである。今までのシリア語文法書ではこのマーカーの出現には定性が関与していることが示唆されているが、本研究では定性が関与的であること、ただし単に定不定という二項的な条件ではこのマーカーの出現を決定できないことを確認する。その上で、1- の出現を左右する要素として定性の階層が関連し、目的語となる名詞句が持つ定性階層での位置がこのマーカーの出現に重要な役割を果たす、という仮説を提案する。

キーワード

シリア語 セム語族 格標示 DOM

1 はじめに

本稿ではシリア語(Syriac)¹の小辞 1- について扱う。この小辞は方向や与格を表す前置詞としての機能を持ちながら、他方で直接目的語標識(以降目的語マーカー)としての機能を有する。ところで後述するように、シリア語は他動詞の直接目的語を表す方法を複数持つ。目的語マーカーとしてこの小辞を用いる方法はそのうちの 1 つにすぎない。換言すると、目的語マーカーとしての 1- は直接目的語標示に必ずしも必要ではない、ということである。Nöldeke(1904)はこの 1- の出現について「目的語が定であるときに用いられる」として、定性(definiteness)が関与していると主張しているが、他方で「目的語が定であっても 1- が表れない場合もあり、1- の出現については全くの不確実さが勝る(...complete uncertainty prevails as to the selection or rejection of a mark..., p.229)」として、その出現条件は特定できていない。本研究はこの問題を解決するための手がかりとして、目的語マーカー 1- の出現と

¹ シリア語はアフロ・アジア語族セム語派の北西セム語というグループに属する言語であるアラム語(Aramaic)の 1 変種である。シリア語は地域的・時間的に多様なアラム語の諸変種のうち、2 世紀半ばから 7 世紀の間に現在のシリア・イラク北部を中心に話されていたもので、さらにキリスト教シリア教会では書き言葉として後代まで用いられた。(Campbell(2000², p.1573))

目的語の定性との関連について検証することを目的とする。

2 先行研究

2.1 シリア語の記述

本項ではシリア語の小辞 $\Delta(-l)$ に認められる用法のうち、目的語マーカ―としての用法に関する既存の記述を整理する。この項で扱う文法書は Nöldeke(1904)、Brockelmann(1962)、Muraoka(1997)、Duval(1881)の4つである。

2.1.1 Nöldeke(1904)

Nöldeke(1904)はシリア語で目的語を示す方法として以下の方法を挙げている。なお、例文はすべて「彼は家を建てた」の意味である。また Nöldeke(1904, p.227)では動詞-目的語の語順の例とそれを倒置させた目的語-動詞の語順の例を併記しているが、ここでは前者のみを記す。

(1) 目的語が不定の場合

ܒܝܬܐ ܒܝܬܐ

bna: bayta:

建てる.perf.3.sg.m. 家

(2) 目的語が定の場合

a. ܒܝܬܐ ܒܝܬܐ

bna: bayta:

建てる.perf.3.sg.m. 家 : 標識なし

b. ܒܝܬܐ ܠܒܝܬܐ

bna: l-bayta:

建てる.perf.3.sg.m. DO-家 : 目的語マーカ―あり

c. ܒܝܬܐ ܠܒܝܬܐ

bna:-y l-bayta:

建てる.perf.3.sg.m.-3.sg.m. DO-家 : 目的語マーカ―、人称代名詞接尾形あり

d. ܒܝܬܐ ܠܒܝܬܐ

bna:-y bayta:

建てる.perf.3.sg.m.-3.sg.m. 家 : 人称代名詞接尾形あり

Nöldekeによると、直接目的語標示の $\Delta(-l)$ は、目的語が定であるときに用いられるものである。言い換えれば、不定の名詞が目的語の場合には用いられない(cf.(1))。ただし、目的語が定であっても l が表れない場合もあり、 l の「出現については全くの不確実さが勝る」(...complete uncertainty prevails as to the selection or rejection of a mark..., p.229)としている。ま

た目的語の名詞と一致する人称代名詞接尾形を伴う場合については特定性がより強調される(The Determination is more emphatic when the Object Suffix...is...added to the verb. p.227)とだけ述べ、そのような代名詞が現れる条件についてはなにも述べていない。その場合におけるIの出現についても、Iが現れない場合がある、とのみ記述し、その背景についての説明はない。

上記のようにはっきりとした条件は示していないものの、彼は名詞句の特性によってある程度の傾向を認めている。彼によると、目的語となる名詞が人名である時には目的語マーカーが現れるのが普通であり、再帰的な人称代名詞接尾形を伴う一般名詞が目的語となる場合には大抵のケースで現れない。また数量を表す表現が伴う名詞句の場合には標識が現れることが多いようである。しかし指示代名詞や疑問代名詞が目的語となる場合には「ある場合にはIが現れ、ある場合には現れない」(...sometimes furnished with $\Delta(-I)$ ², and sometimes not, p.230)と述べるに留まるなど、あくまでも傾向でしかない、ということが指摘できる。

2.1.2 Brockelmann(1962)

Brockelmann(1962)の記述はかなり簡潔なものである。彼によれば、目的語は目的語マーカーを伴わない場合が殆どであり、目的語となる名詞句が定であるときには-Iによって表されることもある(p.115)。しかしそれ以上の記述はない。

2.1.3 Muraoka(1997)

Muraoka(1997)では、直接目的語(direct object)は形式的な標示なしに動詞の隣に現れうる(...can be placed next to the verb without any formal marking. (p.77))名詞として定義され、何かの仲介を必要とする間接目的語(indirect object)と区別される。直接目的語はまた前置詞Iによって標示されることもあるが、これは任意である。

人称代名詞が直接目的語となる時には接尾形が用いられるが、3人称複数の場合のみ、接尾形ではなく Enclitic Form の ennen, ennon が後続する。また動詞が分詞である場合には目的語は人称代名詞であっても Δ によって示される。他方、不定詞に対しては3人称複数であっても接尾形が目的語標示となりうる。その他、人称代名詞が目的語である時に、Iによって示される場合が挙げられている(3)。またそれぞれの用例を(3)'に記す。

- (3) 人称代名詞が目的語である時に、 $\Delta(I-)$ によって示される場合
- a. 強調・対比のための右方移動(fronting) ³
 - b. 他に目的語がある場合

² 翻字は筆者が付した。

³ シリア語の書字方向は文頭が右側となるため、ここでは書字方向にならって「右方」とした。

- c. 幾つかの小辞と共に
 d. 双方の目的語が人称代名詞であるとき (p.78)
- (3) a. l-i: ahpek ʕal ʕedt wa-l-hu: zqap
 DO-1.sg. 返す .Perf.3.sg.m. ～に 職 +1.sg. そして -DO-Indp.3.sg.m. 吊るす.Perf.3.sg.m.
 「彼はわたしを職に返し、彼を木に掛けた」創世記 41:13⁴
- b. ‘armay-n be:t ‘asi:re: ... l-i: wa-l-rabb naḥtu:me:
 (牢に) 入れる.Perf.3.sg.m.-1.pl. 牢獄 ... DO-1.sg. そして-DO-炊事長
 「彼はわたしと料理役の長とを……監禁所に入れた」創世記 41:10
- c. ‘ami:t-eh a:p l-eh
 殺す.Perf.3.sg.m.-3.sg.m. ～も DO-3.sg.m.
 「彼は彼をも殺した」創世記 38 :10
- d. ḥawwey-ni: l-eh
 見せる.Impf.3.sg.m.-1.sg. DO-3.sg.f.
 「わたしにそれを見せるだろう」サムエル記下 15 :25 (p.78)

通常の名詞が直接目的語となる場合には Nöldeke(1904)同様 4 つの方法を挙げているが、Muraoka(1997)はそれらの間に機能的な対立は認めず、全ての例文に全く同じ訳(“they received an/the apostle”)を付けており、定・不定の区別を示していない(4)。

- (4) a. **مقبله**
 qbel šliḥa:
 受け入れる.3.pl.m. 使徒
- b. **مقبله لعلیها**
 qbel la-šliḥa:⁵
 受け入れる.3.pl.m. DO-使徒
- c. **مقبله ,مقبله**
 qablu šliḥa:
 受け入れる.3.pl.m.+3.sg.m. 使徒
- d. **مقبله ,مقبله**
 qablu la-šliḥa:
 受け入れる.3.pl.m.+3.sg.m. DO-使徒 (p.78)

⁴ 日本語訳は口語訳を参照しているが、代名詞の訳など用例として示したシリア語では現れていない語句については示したシリア語に即した訳に置き換えた。以下(3)’の用例について同様である。

⁵ 語頭に子音が 2 つ続く場合には目的語マーカー-l-は la-という形をとる。

2.1.4 Duval(1881)

Duval(1881; pp.325-6)の指摘するところでは、シリア語は目的語標示に関してかなり自由である。彼はまず目的語をそれが定の場合と不定の場合とに分けて、それぞれの場合について以下のルールを立てている。すなわち、目的語の名詞句が定の場合には *l*-が出現し、特に固有名詞の場合にそれがよく見られる。そして不定の目的語は *l*-を取らない。しかしこれは厳密な規則ではなく、定の名詞句が目的語マーカを伴わない例も不定の名詞句がマークされる例も挙げられている。彼はここで、シリア語には聖書ヘブライ語における *ha*-のような定冠詞がなく、定不定が明瞭には区別されないことを指摘している。(…*les Syriens, à défaut d'article, n'ayant pas une idée très-nette de la détermination ; …, p.326*)

2.1.5 まとめ

以上、目的語マーカ*l*-の出現について既存の記述を整理した。今回整理した4つの文法書のうち、Muraoka(1997)を除くすべてが*l*-の出現について定性との関係を指摘している。そこで本研究ではシリア語テキストより収集したデータを利用して、*l*-の出現・非出現と定性との関わりを検証する。またNöldeke(1904)とMuraoka(1997)が、目的語とその性・数に一致する人称代名詞の接尾形を動詞に後接させる目的語の標示(Clitic Doubling と呼ばれる)、及び Clitic Doubling と目的語マーカ*l*-を組み合わせた標示を示しているが、用例が少ないため今回は Clitic Doubling については検討対象としない。

2.2 Differential Object Marking について

ここで、シリア語における目的語マーカ*l*-の出現・非出現に関連して、Differential Object Marking(DOM)という用語について確認しておく。DOMとは、他動詞の直接目的語がその意味的・語用論的な特性によって、ある場合にのみ顕在的な(overt)形式によって表される格標示の方法を示す現象を指す(Sinnemäki(2014, p.282)、Iemmolo&Klump(2014, p.271)など)。シリア語における*l*-の出現・非出現はまさにDOMの一例と呼ぶことができようが、そのような現象はシリア語のみならず世界の言語で広く見られる。以下に幾つかの言語におけるDOMの例を示す。(5)はペルシア語の例である。ペルシア語では直接目的語を示す後置詞 *-ra*: があるが、これは目的語が定るときにしか用いられない(Comrie(1989)p.133)。(6)はシリア語と同じくセム語に属するヘブライ語の例である⁶。ヘブライ語では前置詞 *et* が直接目的語標識として機能するが、それは定の目的語と共起する例が多い⁷ (Jouion-Muraoka(2006, p.415)、Williams(2007, p.168)など)。(3)はスペイン語の例であ

⁶ 転記は概ね池田・高橋・池田(2003)に従った。

⁷ 定の目的語であってもこれを伴わない例がある。e.g. …wayyiben habbayit… 「彼は家(=神殿)を建てた」列王記上 6:1

る。スペイン語では主に有生性が DOM に関与する。スペイン語の場合マーカを伴うのは目的語が特に人間の場合である。従って(3a)はマーカ “a”を伴う一方、(3b)(3c)にはそれが見られない(Haspelmath(2008)p.2)。

- (5) a. Hasan keta:b-rā did.
 ハサン 本⁸-DO 見た
 「ハサンはその本を見た」
- b. Hasan yek ketāb did.
 ハサン 1 本 見た
 「ハサンは一冊の本を見た」
- (6) a. wayyiben ʔet-habbayit ...
 彼は建てた DO-家(定)
 「彼は家(=神殿)を建てた」 列王記上 6:9
- b. wubōno mizbhoṭ ...
 そして彼は建てた 祭壇(不定)
 「彼は祭壇を建てた」 列王記下. 21:4
- (7) a. El director busca a su hijo.
 定冠詞 監督 探す DO 彼の息子
 「監督は彼の息子を探している」
- b. El director busca el carro.
 定冠詞 監督 探す 定冠詞 車
 「監督はその車を探している」
- c. El director busca el perro
 定冠詞 監督 探す 定冠詞 犬
 「監督はその犬を探している」

以上に示したように、DOM という現象は複数の言語にみられるものであるが、目的語マーカの出現に関与する特性は言語によって異なる。定性に左右される例((5)、(6))もあれば、有生性に左右される場合もある(7)。また、同じ特性に関与する場合でも、マーカの出現・非出現を分ける条件が異なることもある。スペイン語では人間の目的語がマークされて、それ以外の無生、及び有生だが非人間の目的語は無標で現れる。他方ロシア語では有生の目的語と無生の目的語が異なった振る舞いをする(Haspelmath(2008); p.2)。

DOM はまたシリア語と同じくアラム語の諸変種に数えられる現代アラム語の諸方言にも見られる。例えば Coghill(2014)が報告するイラク北部にあるタル・カイフ(テルケペ)の

⁸ ペルシア語には定冠詞は無いため定であることは形式としては現れない。

紀後半に求められるため、筆者が卒業論文で利用したものである。¹¹収集した用例は Microsoft Excel を利用して整理する。その際に目的語の定性や動詞の活用に関する情報を入力して、分析の助けとする。ただしシリア語は聖書ヘブライ語とは異なり定冠詞を持たないため、ここでの定不定の判断は前後に現れる修飾要素などの文脈によった。具体的には、人名などの固有名詞、「神」など意味的に特定の対象を指す名詞、人称代名詞接尾形による所有表現を伴う名詞、及び指示形容詞に修飾された名詞を「定」とした。また本稿ではあくまで目的語マーカ-1の出現に定性が関与するのか、ということの検証を目的とするため、原(2016)で示したような煩雑な情報¹²は利用しない。また、拡大した分の用例については以上に述べた情報以外は付加しない。

4 結果と考察

ここでは収集した用例を整理する。表1に収集した他動詞の目的語として機能する名詞句の総数と、そのうち目的語マーカ-を伴う用例の数を示す。その隣には全体に対する目的語マーカ-を伴う用例の割合を示す。

表1：全体の用例数と目的語マーカ-を伴う用例数

全体	目的語マーカ-を伴う	割合
98	17	17.3%

この表を見ると、他動詞の目的語全体に対する目的語マーカ-の現れる用例は2割弱であり、大部分の用例が無標で現れていることが分かる。このことから、Brockelmann(1962)が直接目的語は大抵標識を伴わないとしたのは妥当である。

続いて目的語マーカ-の出現と定性の関係をみる。表2は収集した目的語の用例における定の目的語と不定の目的語の用例数、及びその全体に対する割合を示したものである。また表3、表4には収集したデータ内における目的語マーカ-の出現非出現を目的語の定性別に示した。

¹¹ 本研究で用いるデータは筆者が卒業論文(原(2016))で用いたものを拡大したものである。そのため使用するテキストも卒業論文に準じた。

¹² 原(2016)では1-という小辞がどのような意味で用いられているかということに焦点を当てたことから、方向性や与格を表す1-も収集しており、1-が表す意味を記入する欄を設けていた。また方向性・与格などの1-が共起する動詞について検討するために動詞に関する情報を記載していた。

表2:集めた用例の定不定

不定	54	55.1%
定	44	44.9%
全体	98	100.0%

表3:目的語マーカ-の有無:不定の目的語

マーカ-つき	2	3.7%
マーカ-なし	52	96.3%

表4:目的語マーカ-の有無:定の目的語

マーカ-つき	15	34.1%
マーカ-なし	29	65.9%

集めた用例98例における定:不定の比率はほぼ9:11であり、若干不定の目的語の用例が多いものの、一方への顕著な偏りはない。しかし目的語マーカ-の出現については定性によってかなり顕著な違いが見られる。まず表3に示した不定の目的語の場合を見ると、マーカ-を伴わない例が96.3%と大半を占める。またマーカ-を伴う2例はどちらも天国や神に関係するものを表す名詞句の用例であり、前節で示した「定」と判断する条件を満たさないため「不定」としたが、特定のものを指している可能性も考えられる。

次に表4に示した定の目的語の場合を見る。こちらは目的語マーカ-を伴わない用例が6割を超えるものの、マーカ-を伴う用例も34.1%ほど確認された。このことより、目的語マーカ-の出現には2節で示したもののうちの3文法書が指摘したように定性が関与するものの、定/不定という2項的な対立によって決定されるわけではない、ということが分かる。

ところで、ここまでは固有名詞、意味的に特定のものを指す名詞、所有表現付き名詞、指示詞付き名詞を等しく「定」と扱ってきた。しかしSilverstein(1976, p.122)が有生性について示したのと同様、定性にも階層性が認められる(Croft(1990, p.115)など)。(9)にその「定性の階層性」を示す。

(9) 代名詞 > 固有名詞 > 定の名詞 > 不定特定の名詞 > 不定不特定の名詞

そこで定性がDOMに関与する仕方を明らかにするために、定の目的語についてどのような名詞の用例が集まったかを表5に示す。さらにマーカ-の有無ごとに分けて集計し直したものを表6、表7に示す。その際の分類は(9)の階層性を意識し、固有名詞、意味的に特定のもの、文脈から特定されるもの、とする。意味的な特定性と文脈による特定性を区

別したのは前者が名詞それ自体で定まる一方、後者は名詞に付属する要素によって決定されるためである。また代名詞目的語については、シリア語では名詞とは異なる振る舞いをするため除外した。

表5：定の目的語・全体

固有名詞	8	18.2%
意味的に特定のもの ¹³	1	2.3%
文脈から特定されるもの	33	75.0%
その他	2	4.5%

表6：定の目的語・マーカーつき

固有名詞	8	53.3%
意味的に特定のもの	1	6.7%
文脈から特定されるもの	5	33.3%
その他	1	6.7%

表7：定の目的語・マーカーなし

固有名詞	0	0.0%
意味的に特定のもの	0	0.0%
文脈から特定されるもの	28	96.6%
その他	1	3.4%

表6と表7を比較すると、固有名詞の出現に顕著な差異が見られる。表6の目的語マーカーを伴う用例では約半数にあたる8例が固有名詞の例である一方、表7の目的語マーカーを伴わない用例では1例も見当たらない。他方文脈によって特定されるもの場合はその逆で、マーカーを伴う用例が5例であるのに対し、マーカーを伴わない例が28例と、マーカーを伴わない場合が圧倒的に多い。

以上をまとめると、以下のように言うことができる。すなわち、目的語マーカーは目的

¹³ ここで示した「意味的に特定のもの」には「神」を表す'ala:ha:の用例が当てはまる。今回扱ったテキストはキリスト教関係の宗教文書であるため、ここで表される神はキリスト教における神であり、従って特定の存在である。またその他には数量表現、及び所有を表す人称代名詞接尾形を伴って「自身」を表す再帰的な表現が含まれるが、これらはそれぞれ1例しか収集できなかったため、ここでは考察の対象外とする。

語が人名など固有名詞の時には出現することが殆どであるが、不定名詞の時には現れないことが普通である。そして文脈から指すものが特定される名詞が目的語の場合には、目的語マーカ―が現れることもあるが、現れない場合の方が多い。この事実を(9)に示した定性の階層性と比較すると、以下の仮説を立てることができる。

- (10) シリア語における目的語マーカ―1は定性によって左右され、マーカ―は定性の階層においてより高位にあるものが目的語の場合により用いられやすい。

この仮説による説明は(5)(6)および(8)に示した DOM にも当てはまり¹⁴、シリア語という個別言語を越えた一般性を有する可能性がある。

5 まとめ

本稿ではシリア語の目的語マーカ―1について文献データをもとに用例を整理し、その出現条件について目的語の定性が定性の階層においてより高位にある場合に現れやすくなるという仮説を立てた。しかしテキストに翻訳作品を利用したため、翻訳元の言語からの影響を排除しておらず、シリア語の記述としては問題も残る。またシリア語は話し言葉として用いられた期間も長く、書き言葉としてはさらに後代まで用いられた言語である。地理的にも、東西シリア教会の分裂に伴い東西方言に分かれている。そのため本稿で提案した仮説がシリア語全体に適用できるかという点についても疑問が残る。これらの問題点が今後の課題の主要なものとして残されている。これらの解決を今後の目標としたい。

参考文献

- 池田潤・高橋洋成・池田晶 (2003) 「聖書ヘブライ語のラテン文字転写について 一文字学・文字論的考察と筑波方式の提案一」『一般言語学論叢』6: 61-105.
- 原将吾 (2016) 「シリア語における小辞Δの機能について」 卒業論文, 広島大学.
- Brockelmann, Carl (1962) *Syrische Grammatik mit Paradigmen, Literatur, Chrestomathie und Glossar*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.
- Budge, E. A. Wallis (1899) *The History of the Blessed Virgin Mary and the History of the Likeness of Christ which the Jews of Tiberias Made to Mock at*. London: Luzac & Co. reprinted in New York: AMS 1976.
- Campbell, George L. (2000²) *Compendium of the World's Languages: Volume II: Ladakhi to Zuni*. London and New York: Routledge.
- Coghill, Eleanor (2014) Differential object marking in Neo-Aramaic. *Linguistics* 52 (2): 335-364.
- Comrie, Bernard (1989²) *Language universals and linguistics typology*. Oxford: Basil Blackwell

¹⁴ (7)も定性ではなく有生性の階層にはなるが、あてはまる。

Ltd.

Croft, William (1990) *Typology and universals*. Cambridge: Cambridge University Press

Duval, Rubens (1881) *Traité de grammaire syriaque*. Paris: F. Vieweg.

Haspelmath, Martin (2008) 2. Object marking, definiteness and animacy. In the course materials of *Syntactic Universals and Usage Frequency* at Leipzig Spring School on Linguistic Diversity, March 2008.

Iemmolo, Giorgio & Gerson Klumpp (2014) Introduction. *Linguistics* 52 (2): 271-279.

Joüon, Paul - Takamitsu Muraoka (2006²) *A Grammar of Biblical Hebrew*. Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblico.

Muraoka, Takamitsu (1997) *Classical Syriac: A Basic Grammar with a Chrestomathy*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.

Nöldeke, Theodor (1904) *Compendious Syriac Grammar*. Translation from German by J.A.Crichton, reprint 2003. Eugene, Oregon: Wipf and Stock Publishers.

Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In: R. M. W. Dixon (ed.) *Grammatical Categories in Australian Languages*, 112-171. New Jersey: Humanities Press inc.

Sinnemäki, Kaius (2014) A typological perspective on Differential Object Marking. *Linguistics* 52 (2): 281-313.

Williams, Ronald J. (2007³) *Williams' Hebrew syntax* revised and expanded by John C. Beckman. Toronto: University of Toronto Press

(原将吾 筑波大学大学院生)

On the relation of Syriac object-marking particle *l-* to definiteness

HARA Shogo

Syriac language has an object-marking particle *l-*. Some direct objects make use of it and thus are overtly marked, while others are unmarked. In this article, I propose a hypothesis that what makes this difference is definiteness, specifically definiteness scale. Whether object has the particle or not is determined by this property. Phenomenon like this is called Differential Object Marking(DOM). Since DOM is observed in many languages, in this paper I also compare the phenomenon in Syriac to those in other languages.